

メキシコにおける

先住民の統合と教育

革命(1910年)から憲法改正(1991年)まで

米村 明夫

はじめに

メキシコの1990年のセンサスは、56種類の先住民言語を話す人々が計528万人であったと報告している(通常、先住民か否かの識別は言語によってなされる)。第1表は、メキシコ人口(5歳以上)全体に占める先住民の割合を、バイリンガル人口(先住民語とスペイン語を共に話す者)・モノリンガル人口(先住民語のみを話す者)別に示したものである。それらを合わせた計について見ると、その割合は、50年以降には7～9%程度を示している。しかしメキシコにとって、先住民の存在は、このような数字にはおさまりきれない重要性を持っている。貧困と差別の中にある先住民の現状、あるいは、国民社会の中で先住民がどのように位置づけられてきたかといった問題は、福祉や人権といった観点からばかりでなく、メキシコ国民の全体としてのまとまり、すなわち、国民統合の問題、統合原理の正統性の問題と関わるものとして、現代メキシコ政治のテーマをなすものである。1910年の革命は、国民統合の原理(メキシコ的なもの)を体現し、担うものとして、メスティーソ(混血)を据えた。これに対し、91年の憲法の修正条項は、国民統合の原理として、

多元文化主義を採用し、先住民もその正統なる担い手を構成するものとして、高い位置を与えた。本稿は、国民統合の原理とそこに見られる先住民の位置づけに関するこの変化の過程と意義を、特に、このテーマと密接に関連する教育政策に言及しつつ、歴史的に跡づけ、理解しようとするものである。

1 メキシコ革命とナショナリズム

1821年のスペインからの独立によって、人種による身分や居住制限は撤廃され、法的な平等がもたらされた。しかし、実際には、メキシコ生まれのスペイン人たるクリオーリョは、メキシコ社会の支配者たる地位を得ることとなった一方で、先住民やその文化は、野蛮なものとされ、欧米の文化、制度、思想がモデルとされる状況が続いた。19世紀半ばのレフォルマの時代の自由主義的な改革によって、国政、社会における平等な参加者としての国民の存在、あるいは、教育を通じてのその育成が構想された。しかし、国土の大半を占める農村では、それは事実上机上のプランにとどまった。続くディアス期の経済発展は、外国資本に対する優遇策と農民、労働者の犠牲の上になされ

た。革命は、そうした矛盾に対する国民各層の闘争によってもたらされた。農民は、アシエンダによる土地の取り上げに反対し、その奪還を求めて武装闘争を大規模に展開し、労働者もディアス期末期、革命動乱期にストライキ闘争を繰り返し組織した。

メキシコ革命は、ディアス期に急速に進んだ外国資本による近代化、一部の富裕なメキシコ人のみが潤う近代化を、国民的な性格のそれに変えようとする政治・社会革命であった。その意味でそれは、近代化の歯車を逆転させようとする反動的なものではなく、進歩の運動であり、それはまた、本質的に国民の一体性を要請し、それを作り出していくナショナリズムの運動でもあった。農民の土地回復の要求や労働者の労働条件の改善要求は満たされるべきであったが、それは近代化がより広い社会層を基礎に進められる条件を作り出すために必要なものでもあった。1917年の憲法は、農民や労働者の運動と要求を正統性を持つものと認め、それを新しい体制の根本に据えた。こうして、革命の動乱後の政府の指導者達は、革命の高揚とともに強く感じられたナショナリズムを、さらに押し進めていくことにとりかかった。それは、新しいメキシコ社会の主人公たるメキシコ国民の像を新しく描き出し、広めることを通じて、人々の間にその一体的な意識を強めていくという、文化あるいは教育の分野の仕事として進められた。

2 メスティーソの原理とその理論化

革命後のメキシコ社会を支えるのがメスティーソとされ、あるいは、メキシコ的なものとはメスティーソ的なものとされたのは今日考えて見れば、いくつもの理由で自然なことであった。第1に、クリオーリョは、ディアス期の支配層であり、

第1表 メキシコ5歳以上人口中先住民語を話す者の割合

(%)			
年	バイリンガル	モノリンガル	計
1930	7.59	8.44	16.03
1940	7.47	7.37	14.84
1950	3.91	3.61	7.52
1960	5.79	3.32	9.11
1970	5.62	2.15	7.77
1980	6.43	2.04	9.01
1990	6.01	1.19	7.49

(出所) 各年の人口センサス。

外国資本と結びつきつつ、スペンサー等の社会進化論的思潮によりながら自らの支配を正統化し、より広い国民的な利益を省みようとしなかった。これをくつがえそうとした革命が、クリオーリョやそれにまつわる文化を拒否したのは当然であろう。他方、第2に、メスティーソはディアス期に育っていた中産階級ばかりでなく、農民や労働者を含むメキシコ全人口の多数を占めていた。すなわち、指導者と大衆と双方を含む広がりを持っていた。そして、革命を担ったのはまさにメスティーソであった。第3に、インディオは、農民軍を構成するものとして多数が革命に参加していたが、独自のイニシアチブを発揮することなく、「近代化への妨げ」という独立以来の観念は修正されることがなかった。

このように、メスティーソを新たな国民像に据えることは、社会的な条件によって規定されていたといえるが、これを、思想、哲学のレベルで理論的に合理化した重要な人物の一人が、初代の公教育大臣も務めたパスコンセーロスである。彼は、スペイン的なものが自分たちの思索の糧になっていることを認めつつ、他方で、滅ぼされたインディオの文明がすばらしいものであったのであり、自分たちの血の中に、それが受け継がれていることも、自覚しようとする。これら両者の混血を通

じて、「言葉と文明はスペインから、魂と肉体はインディオから」つくられたメスティーソが現れるが、それは、彼にとっては、たんなる混血ではなく、新しい人種「普遍的人種」(raza cósmica)たるメキシコ人の誕生であった。「普遍的人種」という命名からわかるように、バスコンセーロスにとって、それは、メキシコのナショナリズムを支える内容を提供するだけでなく、さらにメキシコという枠さえも超えた新たな哲学的、文化的なものを伴った理想的な人種として構想されたものであった*1。

このような発想は、西欧的、スペイン的なものにプラスの価値を、先住民的なものにマイナスの価値を、そしてその中間にメスティーソを見ていた革命前の価値の枠組からいえば、大きな転換であった。なぜなら、メスティーソの価値を高く位置づけるためには、先住民的なものの価値を評価し直すという作業は不可欠であり、それは、既存の価値の枠組を破壊せざるを得ないものであったからである。バスコンセーロスの提唱と庇護の中で進められた壁画運動においては、先住民の生活やそのスペイン人との英雄的な闘争が好んで取り上げられた。表現内容の新鮮さ、表現形式の力強さは、すべてのメキシコ人に誇りと歴史的一体感を呼び覚ますのに大きく貢献した。

しかし、バスコンセーロスによるメスティーソ＝「普遍的人種」の理想化、国民像化は、進歩史観的な構造を持っており、その結果、過去のインディオとその文化を称揚する一方で、現存のインディオやその文化を価値の低い存在、あるいは、メキシコ化＝メスティーソ化(人種的混血、文化的混合)されるべき存在として、とらえることとなった。すなわち、メスティーソを産み出す一方の要素であるインディオは、偉大な文明の担い手であったことが確認されるが、しかしそれは、「普遍的人種」を生み出した時点で歴史的使命を終える。先住民

の正の遺産の正統なる後継者は、「普遍的人種」たるメスティーソとされ、他方それ以降の先住民の直接の子孫たち、すなわち今日のインディオは、歴史遺産を奪われ、停滞の中にとり残された、無意味な存在とされるのである。実際、ナショナリズムを高揚させた壁画の中の先住民の姿の多くは、現在のそれというより、スペイン人がやってくる以前のものであった、ということは注目に値する。

国民統合＝メスティーソの原理は、三文化広場(スペインによる征服以前の古代文明の遺跡、その上に立つカトリック教会、そしてその向いに近代的な外務省のビルと、という三つの時代の文化の象徴を持つということから名付けられた)の碑文に次のように表現されている。「1521年8月13日、クワウテモックによる英雄的な防御の試みにもかかわらず、トラテロルコは、エルナン・コルテスの手に落ちた。それは、勝利でもなく、また、敗北でもなかった。それは、今日のメキシコ、すなわち、メスティーソの苦痛に満ちた誕生だったのである」。メキシコ＝メスティーソという原理は、以上指摘したように、先住民に対する差別を事実上変えることなく存続させることを意味していた。とはいえ、それが、絶対的肯定や勝利に酔い痴れたナショナリズムとは、異なった性格のものであることには、注意しておくべきであろう。自分達の「誕生」を「苦痛に満ちた」ものとしてとらえることは、メキシコの文化・思想に複雑さ、深さ、陰影を与え、魅力的なものとしたのである。

*1 Vasconcelos, José, *La raza cósmica: misión de la raza iberoamericana, Argentina y Brasil*, México D.F., Espasa-Calpe Mexicana, 1948.

3 先住民地域における農村学校

近代化の方向で国民を統合しようとする政府に

とって、どうしても着手しなければならないのは、農村における学校の普及であった。末端国民にまでつながる政治、行政の確立と、人々の意識に直接働きかけて国民的な一体感を形成していくものとしての教育は、不即不離の関係にある。特に、言語的にスペイン語を日常的に用いない地域では、スペイン語の普及(スペイン語化)とそのための教育は、絶対的に必要なことであった。法律的には、連邦の1867年の教育組織法や各州の類似の措置によって、初等教育の義務化がうたわれていたが、農村における教育の普及は、事実上、行なわれないうまま放置されていたのである。

政府は、1920年代以降、農村学校の普及を強力に押し進めようとするが、それは、理念的にも制度的にも、都市の学校とは異なった性格を持つものであり、バスコンセーロス(農村学校)を「人民の家」(Casa del Pueblo)と命名した。それは、村の近代化のためのセンターであり、村の生活と人々の意識を変えるものと観念されたのである。25～28年の公教育省次官を務めたサエンスは、カトリック教会を迷信や古い生活様式を変えようとしないう農村の人々の中心にあるものととらえた。そしてそれにとって代わるものとして農村学校の普及を推進した。しかし、農村学校に着任した教師が、その農村教育の理念や使命に忠実であろうとしても、それは困難なことであった。サエンスも、農村学校を視察した後に、その政策の浸透が思うとおりに進まないことを次のように嘆いている。「古い様式の停滞的な生活。学校の弱い影響は、意識の暗闇に消えていく。もし、十分に影響力のある教育計画と学校が共同体の中へ自らを敢然と投げ出していくことを強いる社会哲学がなければ、先生たちが教え続け、政府が学校への援助を続けても、そうした努力とお金はあたかも底の無い穴の中へ入っていくように消えてしまうだろう」*2。

このように、サエンスの希望とは異なり、農村の現実には革命がもたらそうとした近代的なものを容易に受け入れるようなものではなかった。学校の普及は、きわめて緩慢なものであったと同時に、その学校は、当初の理想とはかけ離れた官僚的なものとなった。先住民地域では、しばしば農村学校は、懐疑の眼差しで迎えられた。そこでは、スペイン語化＝メキシコ化が、政府の側からは目指されていた。しかし、この任務を担う教師達は、共同体の外から派遣された者であり、時には、ただ一方的にスペイン語を注入しようとし、時にはそれにさえも不熱心なのであった。1940年代から60年代頃までの農村学校に通っていた先住民のいくつかの証言を見よう。

学校には、11歳から16歳の大きい子供ばかりだったのに、わしは、6、7歳だった。そこでは、先生はただスペイン語だけを話していて、わしらに話すことはわからなくて、わしは何にも覚えなかった。これは、好都合だった。終わりにしたいというと、何かいっぱい先生は答えたが、わしは何にもわからず……だけど、ともかく遊びに出て、次の日まで学校には戻らずというわけだ。ずっとこんな具合で、やっと、つぎのことに気がついた。少々スペイン語を話す大きな子供たちは、サポテコ語を教室で話していると、250メートル離れた所から、土レンガを運んでくるという罰を受けていた。わしらも同じ罰を受けたところかもしれないが、わしらはスペイン語がわからないので、いいつけることすらできないんだ。こんなふうに、学校には行っていたんだが、覚えるべきことは何にも覚えなかったし、先生もけっして気にかけていなかった。何故って、そのことについては、何にも言っていなかったし、それとも、何か言って

いたんだけど、わしらが理解していなかったのかもしれない*3。

実は私は学校を大事だと思ったことは全然ないんだ。もし、何にも理解しないなら何になるんだ。この村で学校へ行き始めた。2年間だったと思う。何を教わったか思い出せない。遊んでばかりいたからね。それに私らの教師は村の者で酒を飲んでばかりいた。ちょっとくると黒板にちょっと書いて、自分は家に帰ってしまった。こんなふうに村では学校生活を過ごした*4。

一緒に入った2人の友だちはすぐに逃げちゃった。ひとりは1カ月くらい、もうひとりは、1カ月半くらいただけで叔父さんたちといっしょにフィンカ〔農園〕に逃げちゃった。学校の先生は、カイシュラン〔よそ者〕だった。サン・クリストバルに住んでいて、月曜に奥さんとやってきて学校に2人して泊まる。……先生はツォツィル語はまったくだめで、カステイーヤ〔スペイン語〕だけだ。教えてくれたのはカステイーヤだけだが、ともかくもまあその先生はおっかない人だった。1年しかもたない先生もいれば5、6カ月でいなくなる先生もいた。先生が話すカステイーヤがわからないと、時には、「何でわからないんだ」と怒鳴りつけて、わしらを定規でしたたかなぐることもあった。こんなことをする先生は、すぐやめさせられちゃったんだ。いい先生の場合だけ1年とか2年とか続いたんだ*5。

ある政府高官は、次のように嘆いている。「われわれの無力のゆえの、農村学校と農村教育の悲しい結果を見ると、苦い涙がさそわれる。使命感と熱意を持った当初の先生たちはほとんど残っていない。

われわれは、ただ、教育らしいこともしようとしない官僚たちだけを見出し、そして、エヒード（共同体）の大衆は、毎日われわれから遠ざかっていく」*6。しかし、このような学校であっても、その数は遅々としてではあるが先住民地域を含め増加していく。それは、人々の教育への要求、スペイン語学習への要求が、わずかながらとはいえ、成長しつつあったことの反映といえよう。そして、1970年代に入ると農村における教育普及は、一変して急速なものとなる。特に、先住民地域のそれは、先住民自身の権利を掲げる運動に支えられながら、バイリンガル教育の展開という形をとって、農村教育、先住民地域における教育が新たな段階に入ったことを明確にするのである。こうした70年以降の新展開を扱う前に、それを準備した諸条件を見ておくことにしよう。

*2 Meneses Morales, Ernesto, *Tendencias educativas oficiales en México 1911-1934*, Mexico D.F., Centro de Estudios Educativos A.C., 1986, p.462.

*3 Castellanos, Javier, “El proceso educativo en el medio indígena; testimonios de mixes y zapotecos,” Secretaría de Educación Pública, *Diagnóstico y evaluación de alternativas educativas para la población indígena*, tomo II, 1982, p.335.

*4 同上論文 363ページ。

*5 リカルド・ポサス、清水透『コーラを聖なる水に変えた人々』現代企画室 1984年 165ページ。

*6 Meneses, 前掲書, 462ページ。

4 インディヘニスモとその成果

政府の先住民に対する基本政策は、メスティーソ的なものの受容を進めること、スペイン語化、そのための学校の普及であり、それは、基本的に

は、農民学校という農村一般におけるのと同様の教育施策を通じて追求された。しかし、先住民地域における教育普及の困難さは際立ったものであり、特別の扱いが必要なことは時間の進展とともに明らかになっていった。カルデナス大統領の下で開かれた1940年の第1回米州インディヘニスモ会議では、急速に発展しつつあった文化人類学の成果も受けて、その文化や言語を尊重しつつ、先住民の統合を図る必要性が確認された。また、カルデナスは同様の立場から、先住民問題を専門に扱う行政機関、先住民問題独立局を設置している。先住民の文化や言語を尊重しつつ、先住民の問題を調査し、その解決を探るという方向はさらに、48年の国立インディヘニスタ庁(Instituto Nacional Indigenista)の創設に結実した。

政府によって支えられたインディヘニスモは、メスティーソの側からの先住民を統合するための活動であった。インディヘナとは先住民自身を指すのに対し、インディヘニスタとは、インディヘナ問題に関わる人々、すなわち、先住民を統合するために活動するメスティーソを指していた。したがってまた、インディヘニスモは、インディヘニスタによるそのような活動と思想を意味するのである。しかし、それは、メスティーソの側からのものとはいえ、先住民の文化の尊重という思想を明確にした人々によって担われることとなり、その活動は、機械的あるいは強制的に国民統合を進めようとする、官僚的あるいは国家主義的な性格のものとは異なっていた。

インディヘニスモの立場からの先住民問題へのアプローチは、小規模のものではあったが、しだいに実質的な成果を挙げていった。1950年代から始められたバイリンガル教育のパイロット・プロジェクトは、60年代には、六つの地域、200を超える学校で、進められるほどになっていくのである

が、それらは、インディヘニスモの思想、活動が実質的に広がっていったものと理解することができる。

1970年代の先住民自身による運動の展開を準備したという観点からいえば、インディヘニスモの最も大きな成果は、個々のプロジェクトの成功よりも、その教育的な努力を通じて、メキシコ社会の現状についての知識、理解力を持ち、自らを主張できる先住民を育成することとなったことであろう。すなわち、運動の主体的条件を準備したのである。特に、60年代のバイリンガル教育システムの拡大は、先住民の知識人たるバイリンガル教師群という一つの勢力を誕生させていた。

また、政府が行なってきた地域師範学校や寄宿制学校などの政策は、一部の熱心な先住民に教育機会を提供してきた。それらの教育は、むしろ、しばしば学生を、先住民共同体の持つ価値観、伝統から離反させるようなものであったとはいえ、その卒業生の少なからぬ部分が、先住民としての根を完全に絶ってしまったのではなかった。彼らもまた、メキシコの新しい政治的な動きを受けて、高揚しようとしていた先住民の運動に呼応する、潜在的勢力を形成していたことを見逃してはならない。

5 経済発展と政治情勢の変化

メキシコは、1930年代以降60年代まで着実な経済発展を遂げてきた。しかし、その成果は、労働者や農民には十分には還元されてこなかった。メキシコ革命を通じて約束された労働者、農民の福祉と権利は、むしろ、経済発展を優先させる権力政治の中で危ういものとなっていた。このような経済発展による社会矛盾は、積極的な教育要求を含む先住民の政治的な運動が勃興するための客観



オアハカ州ミッヘ民族の日曜市（筆者撮影）

的条件を準備した。

経済発展と政府の国民統合策は、道路や車等の交通手段、ラジオなどのコミュニケーション手段、そして不十分とはいえ学校を通じて、人々や物、情報の流れを農村にまで広げてきた。また、農村から移動する人口は増大し、その地理的範囲も拡大しつつあった。先住民地域でも同様の傾向が見られ、教育、スペイン語の有用性を自覚するための客観的な条件が形成されつつあった。また、同時に、農民、先住民の生活範囲、そこに流れ込む情報の広がり、経済発展の中で拡大していく格差を人々にいやでも知らせていくこととなり、人々の不満は、高まっていったのである。

1968年に、政治の民主化を求めて立ち上がったのは、経済発展の中で成長してきた中産階級であり、その子弟である学生であった。そして、その運動は、政府の血生臭い弾圧によって鎮められる。しかし、変化を求める声がそれによって収まるものではないことを、政府は認めざるを得なかった。70年に就任したエチェベリア大統領は、自らも左翼的な言辞を用いつつ、政治的な開放を進めた。この下で、さまざまな社会運動や言論、思想が活気づき展開を見せることとなった。

こうした流れの中で、批判的文化人類学を称する研究者たちによって、従来のインディヘニスモ

の理論的な支柱であった文化人類学者に対し、結局のところインディオの存在の抹殺に手を貸してきた者という批判が行なわれ、批判された研究者の反批判や、他の論者による論争が展開されることとなった。しかし、これらの論争は、学問的な意義というよりは、社会的な意義を明白に持っていた。すなわち、それは、先住民自身の主体性というテーマへの問題提起であったのであり、この問題提起は、先住民自身の運動の高揚という形で、すぐに回答されることとなったのである。先住民の中でそうした問題提起を理解し、かつ、それへの回答を言葉と運動を組織することによって表現できる人々を、その時点までに用意してきたのは、すでに指摘したように、実は、批判的文化人類学によって攻撃されたインディヘニスモであった。批判的文化人類学をめぐる論争の火花は、先住民自身による運動を用意した主体的条件と客観的な条件によって合成された火薬の中に、飛び散っていったのである。

6 先住民の運動の登場から憲法修正まで

1975年には、第1回全国先住民会議が開かれ、また、76年には、全国バイリンガル教師連盟が結成されている。これらは、先住民が主体として、しかも先住諸民族が団結して、メキシコの全国政治に登場した画期的なできごとであった。彼らは現状の無権利状態、被搾取状態を非難し、先住民としての生活様式、文化を守りながら、経済生活を改善していくこと、そのための権利を認めさせていくこと、を主張した。それらの要求は、単なる経済要求に終わるものというよりも、社会、文化レベルでは、先住民としてのアイデンティティの尊重、そしてそれを政治的なレベルで表現すれば、先住民の自治権の主張にも結びつき得るもの

であり、明らかに、これまでの国民統合の基本原則としてのメスティーソの原理に対する挑戦であった。

エチェベリアは、先住民的な価値の称揚を図り、先住民の組織化を後援し、バイリンガル学校の急速な拡大をもたらし、メスティーソの原理の崩壊を加速した大統領であった。彼は、新しい国民統合の原理の定式化を見出したわけではなかったが、その政治的センスは、先住民の主張を積極的に取り込むことによって、メキシコの国家としての正統性が維持されるということを教えていたのである。そしてその方向は、現在のサリーナス大統領に至るまで踏襲されることとなった。1977年の連邦教育法には、スペイン語教育において、「先住民言語の使用を妨げることなく」行なう旨が盛り込まれ、79年には、教育行政の中で、先住民教育、すなわち、バイリンガル・バイカルチュラル教育が初等教育あるいは初等前教育として例外的なシステムではなく、正当な位置を持つものであることを明らかにした組織改革が行なわれ、86年には、国立インディヘニスタ庁への先住民の参加条例が出される。そして、91年には、これらの流れの一つの総括、到着点ともいえるべき憲法改正が行なわれる。そこでは、メキシコ国民の統合原理が、文化的多元主義という形で、次のように明記されている。「メキシコ国家は、本源的には先住諸民族によって構成される多元文化的な構成体である。先住諸民族の言語、文化、習慣、慣習、資源および社会組織の固有な形態は法律によって保護、振興され、またその構成員の国家司法への効果的なア

クセスは法律によって保証されねばならない。制定される法の条項は、先住諸民族が関与する農地裁判、訴訟において、先住諸民族の法的慣行が考慮されるようなものでなければならない」(第4条)。最高法規たる憲法において、先住民の存在、その文化が、メキシコ社会で正統なる位置を持つことが、初めて確認されたのである。

おわりに

このような政府の政策は、「参加」という枠組を先住民に対して用意するものといえるが、先住民の運動の大勢は、この枠組を認めつつ、自らの要求を実現しようとしている。1970年代以降のメキシコの現実政治への多少なりともの参加、今日の高度に発達した資本主義社会の現実との接触は、他の選択肢の非現実性を感じさせるものであった。91年の憲法修正は、このような流れにおいて理解することができ、その意味では、それは、文化的多元主義の宣言がメキシコの国民的な統合を妨げるものとはならない、と判断するにいたった現政府の自信を示すものともいえる。しかしまた、この憲法修正が政府にとって重い約束を意味していることを見逃してはならない。すなわち、それはただ理想を述べたものとしてではなく、スペイン人の到着、支配以来の500年にわたる先住民に対する不正と搾取に謝罪し、それらに対する補償を義務づけた政治文書としても理解されるべきものである。

(よねむら・あきお／地域研究部)